

令和 5 年 5 月 9 日現在

機関番号：23903

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K14420

研究課題名(和文) 重度精神障害者を介護する家族の感情評価尺度の開発—介護過程の曼荼羅的理解—

研究課題名(英文) Development of Care-related Emotional Assessment Measure for Families Caring for Individuals with Severe Mental Disorders - A Mandala-like Understanding of the Caregiving Process

研究代表者

白石 直 (Shiraishi, Nao)

名古屋市立大学・医薬学総合研究院(医学)・助教

研究者番号：30632989

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究で開発したケア関連感情評価尺度のポジティブ感情下位尺度は、二つのネガティブ感情下位尺度とともに良好な構造的妥当性を示した。また、前者のCronbachの係数は0.92、後者のものは0.93および0.95と十分な内的一貫性を示した。

さらに新規介入の着眼点を明らかにするため、精神病性障害の患者と兄弟姉妹の続柄にある家族を対象とし、患者の機能障害と家族のネガティブ・ポジティブ感情の介在因子としての介護負担および首尾一貫感覚の役割を共分散構造分析により検討した。その結果、兄弟姉妹を感情面で支援するためには、介護負担と首尾一貫感覚の両方に焦点を当てたアプローチが有効であることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

感情は、個人の主観的な苦痛や苦悩を規定する重要な内的体験であるが、統合失調症を始めとする重度精神障害者のケアに関連して家族が抱く感情のネガティブおよびポジティブ両面からの総合的な評価はほとんど行われていない。本研究は、重度精神障害者のケアに関連した家族の感情を評価できる新規尺度を作成し、その信頼性・妥当性を検証して実用化することで、ケアのどのような側面が家族に不安や怒り、抑うつなどの感情を引き起こすかを明らかにし、新たな介入の着眼点を明らかにする社会的な意義を有した。

研究成果の概要(英文)：The Care-Related Emotion Assessment Measure developed in this study demonstrated robust structural validity, encompassing one positive emotion subscale and two negative emotion subscales. Moreover, the Cronbach's alpha coefficient for the former was 0.92, indicating substantial internal consistency, while the coefficients for the latter were 0.93 and 0.95, showing excellent internal consistency.

To elucidate potential focal points for novel interventions, we examined the role of caregiving burden and sense of coherence as mediating factors between the functional disabilities of patients with psychotic disorders and the negative and positive emotions of their siblings, using a covariance structure analysis. The results suggested that an approach that simultaneously addresses both caregiving burden and sense of coherence could be effective in supporting siblings emotionally. The obtained results were published in PCN Reports (<https://doi.org/10.1002/pcn5.55>, 2022).

研究分野：臨床心理学

キーワード：家族介入 尺度開発 精神病性障害 ポジティブ感情 介護負担 首尾一貫感覚

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 重度精神障害者のリカバリーを家族とともに促進する支援の社会的意義

重症化する精神疾患を発症後、回復に至るまでの経過は長期に渡ることが多く、患者と共に生きる家族も負担を抱えることが多い。長期経過をたどる例は、統合失調症以外の精神疾患でも少なくない。例えば、うつ病では、20%の患者が1年以上の慢性的な抑うつ状態に陥り、一旦寛解しても、5年経過して患者が無症状である確率は35%程度に過ぎない。代表者らは、そのような患者を抱える家族が被る心理的負担は重く、半数がうつ病や不安障害を疑うレベルを満たしていることを報告した (Katsuki, Shiraishi et al. BMC Psychiatry 2011)。その報告を踏まえ、難治性の精神障害があっても、患者が家族とともに充実した満足感のある生活を送れるための支援が社会的に求められていることを提唱した (Katsuki, Shiraishi et al. Trials 2014; Katsuki, Shiraishi et al. BMC Psychiatry 2018)。

### (2) ケアに関連した家族の感情を測定する尺度を開発する学術的意義

重度精神障害者のケアに関連した家族の心理状態の解明は、支援を効果的にするため不可欠である。例えば、思春期・青年期に好発する精神疾患は、発症早期の若年患者の割合が高い。代表者の調査では、統合失調症患者の家族の約30%が精神疾患を疑うレベルの心理的負担を呈し、発症早期の患者の家族は不安によるストレスが怒りによるものより高く、それとは逆の傾向を慢性期の患者の家族は示していた。その差異の一因として、若年世代が呈しやすい暴力のような衝動性が家族の不安に影響を及ぼすことが推測された (Shiraishi et al. PLoS One 2014)。これらの研究を通して代表者は、ケアのどのような側面が家族に不安や怒り、抑うつなどの感情を引き起こすかを評価する尺度の開発は、介入の着眼点を明らかにする意義があると考えた。

## 2. 研究の目的

感情は、個人の主観的な苦痛や苦悩を規定する重要な内的体験であるが、重度精神障害者のケアに関連して家族が抱く感情のネガティブおよびポジティブ両面からの総体的な評価はほとんど行われていない。本研究の第一の目的は、重度精神障害者のケアに関連した家族の感情を評価できる新たな尺度を作成し、その信頼性・妥当性を検証することである。第二の目的は、ケアの肯定的側面を高め患者のリカバリーの促進に波及する新たな家族介入を開発することである。

## 3. 研究の方法

### (1) 新規尺度の作成

代表者は、グラスゴー大学のスコットランド人研究者と協力して質的研究の系統的レビューを行い、重度精神障害者のケアが家族に及ぼす影響を分析し、どのようなケアの側面がネガティブおよびポジティブな家族の感情を引き起こすかを同定した (Shiraishi & Reilly. Soc Psychiatry Psychiatr Epidemiol 2018)。否定的な側面として、将来の不確実性・病状の予測不可能性、生活・健康に抱く期待の喪失、個人的・社会的資源の不足、病因と疾患を理解する難しさ、偏見・遺伝可能性、家庭の崩壊、患者と家族、医療者間の人間関係の対立が同定され、肯定的な側面として、関係性の肯定的評価 (家族の絆・愛情・思いやり)、対処力の肯定的評価 (知識とスキル・自信・人間的成長)、家族の受容的行動 (肯定・賞賛・感謝) が同定された。それぞれの側面に関連したネガティブ感情 (恐怖-不安、怒り-不満、抑うつ-疲労、驚き-混乱、罪悪感-恥) およびポジティブ感情を5段階で測定できる72項目の質問を代表者が草稿した。その質問に研究チーム、続いて家族介護者による検討と修正を加え、約半数の項目を選択することにより新規尺度を作成した。

### (2) データ収集

新規尺度と比較尺度 (家族のネガティブ・ポジティブ感情、介護負担、首尾一貫感覚、患者の機能障害などを測定) を、精神病性障害/双極性障害/大うつ病性障害の患者と父母/配偶者/兄弟姉妹の続柄にある家族を対象とし、名古屋市立大学の精神科病床を有する教育関連病院および愛知・岐阜・三重の精神障害者家族会で実施することを計画した。

### (3) データ解析

構造的妥当性と信頼性 (内的一貫性) を検討するため、探索的・確証的因子分析とクロンバック係数を算出した。さらに尺度研究と並行し、重度精神障害者の家族のネガティブ感情を軽減させ、ポジティブ感情を増加させる新規介入の着眼点を明らかにするため、精神病性障害 (統合失調症/失調感情障害) の患者と兄弟姉妹の続柄にある家族に実施した比較尺度の結果を用い、患者の機能障害と家族のネガティブ・ポジティブ感情の介在因子としての介護負担および首尾一貫感覚の役割を共分散構造分析により検討した。

## 4. 研究成果

### (1) 新規尺度の作成

自記式評価尺度を、以下の手順で完成させた。

- A) 代表者が重度精神障害の家族にネガティブおよびポジティブ感情を引き起こすケアに関連した認知的側面を抽出し、72項目の質問を草稿した。
- B) それらの質問に、多職種の医療専門家からなる研究チームで検討を加え、暫定版尺度が作成された。
- C) 重度精神障害者の家族複数名に暫定版尺度を確認してもらい、不適切な表現の有無や不適切な場合の代替表現案などの意見を聴取し、研究チームで修正した。
- D) BとCのプロセスを繰り返し、研究チームのメンバー全員から修正箇所承認を得て36項目から成る新規尺度（ケア関連感情評価尺度 Care-Related Emotion Assessment Measure、以下 CREAM）を完成した。

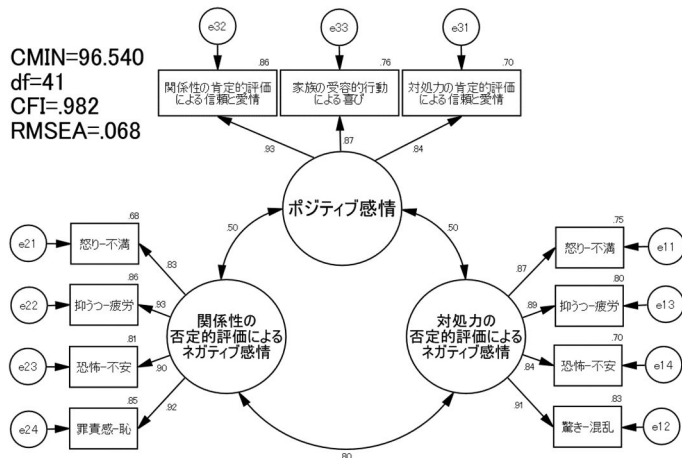
新規尺度 CREAM の内容的妥当性（内容が目的とした構成概念を十分に反映している程度）は、以下のように担保された。概念モデルに関する情報は先行研究（[Shiraishi N & Reilly J. Soc Psychiatry Psychiatr Epidemiol 54:277-290, 2019](#)）で検討し、その質的研究の系統的レビューのナラティブな分析（[Shiraishi N & Reilly J. Current Psychology DOI:10.1007/s12144-020-01185-2, 2020](#)）をもとに尺度項目を作成した。次に、研究チームにより全項目が、構成概念が包括的に項目に反映されていること、構成概念の側面を反映していること、目的とする母集団と関連していること、測定指標の目的と関連していることを確認した。さらに、重度精神障害者の家族により全項目の包括性および関連性を確認した。

### (2) データ収集

当初、名古屋市立大学の教育関連病院と東海三県の精神障害者家族会でデータ収集を計画した。しかし、COVID-19 の流行に伴い、感染を拡大させる危険性のある実地調査を中止せざるを得なくなり、インターネット調査を実施した。その調査の結果、精神病患者の兄弟姉妹や配偶者を含む611例のデータが欠損値なく得られた。

### (3) 新規尺度 CREAM の特性

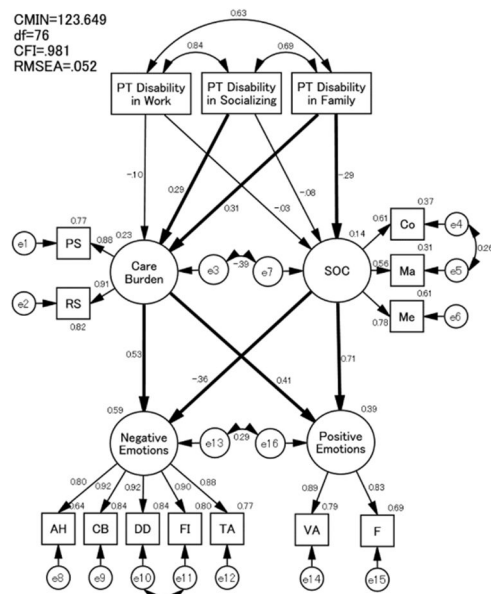
データ解析の結果、以下の尺度特性が明らかにされた（未発表データ）。家族のエンパワメントの促進要素を反映したポジティブ感情下位尺度は、二つのネガティブ感情下位尺度とともに良好な構造的妥当性を示した（右図）。さらに、ポジティブ感情下位尺度の Cronbach の係数は 0.92、二つのネガティブ感情の下位尺度のものは 0.93 および 0.95 と十分な内的一貫性を示した。



### (4) 新規介入の着眼点の解明

統合失調症（80.2%）または失調感情障害（19.8%）の患者と兄弟姉妹の続柄にある237名の家族（平均年齢42.3歳）が調査に参加した。共分散構造分析では、介護負担の重さが、患者の2つの障害（社会生活と家族間のコミュニケーションの障害）と家族の感情を、ネガティブ感情のみならずポジティブ感情も予測する有意なパスを通して介在した。また、首尾一貫感覚は、患者の家族間コミュニケーションの障害と家族の両感情の間で介在効果を示した。

兄弟姉妹のネガティブ感情は、患者の社会生活と家族間コミュニケーションの障害に対処する中で、介護負担を抑制して首尾一貫感覚を強化することを目的とした介入により軽減する可能性がある。介護負担は兄弟姉妹のポジティブ感情に寄与する可能性があることに留意しながら、介護負担を軽減させつつポジティブな感情を増加させることが考えられる。加えて首尾一貫感覚を向上させることで、家族間のコミュニケーション障害に対処し、兄弟姉妹の感情をより良い方向に導くことが考えられる。上記の精神病性障害の患者の



兄弟姉妹を感情面で支援するためには、介護負担と首尾一貫感覚の両方に焦点を当てたアプローチが有効であることを示唆した結果は、国際誌に発表された (Shiraishi N et al. PCN Reports <https://doi.org/10.1002/pcn5.55>, 2022 )。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Nao Shiraishi, Hiroko Yatsu, Haruka Ogawa, Tatsuo Akechi	4. 巻 Volume1
2. 論文標題 Mediating effects of care burden and sense of coherence between patients' disabilities and siblings' emotions in psychotic disorders	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 PCN Reports	6. 最初と最後の頁 e55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/pcn5.55	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------